

私の食べている味噌の行く末

川嶋 みずか

(コミュニティ政策学科2年)

研究動機

まず今回論文を執筆する経緯を述べたいと思う。私が「地域活性化」に興味を持ち始めたのは中学3年次に卒業論文を執筆したことがきっかけだ。そこから、高校1年次に外部の地域文化に関する論文コンテストのために「農家のこと本当に知ってる？」を執筆した。多くの人を書く「外から見た」秋田県横手市ではなく、米農家である祖母の兄弟の生活をもとに「内から見る」地域文化についてだ。例えば、農家にとっての田植えや稲刈りが終わった夜の大宴会の様子や先祖に対する伝統行事に関して書いた。今回は、昨年コミュニティ政策学科に入学してこの2年で様々なことを学び、吸収したためその学びを生かした論文を執筆していく。

はじめに

研究動機のところでも述べているように今回の論文の舞台は、秋田県横手市である。まず横手市と聞いて多くの人がイメージするのは、「あきたこまち」の産地であるということではないか。もしくは、冬にテレビで豪雪地帯の場所として放映される場所であったり食べることが好きな人は「横手焼きそば」を連想するかもしれない。横手市はこういう意味では知名度は低いだろう。しかし、米どころということから日本酒の生産や手作りの味噌や漬物のほかに、秋田県独特の文化や慣習が存在する。特に味噌に関しては、横手市に住む大叔母が作った味噌を生まれた頃から食べ続けている。東京に住んでいながら大叔母の手作り味噌を食べ続けているため、市販の味噌はどうも味が薄いと感じてしまい、口に合わないほどである。しかし、私の祖母は8人兄弟の末っ子でその祖母は今年79歳になり、兄姉である大叔父や大叔母はゆうに80歳を超えている（存命は5人）。味噌の手作りが主流だった世代は高齢化が進み、味噌も「買うもの」へと変化している最中だ。そのため、私が生きていく上で、ずっと大叔母の手作り味噌を食べ続けるのは難しい。だが、私はできることなら、食べ続けたい。そうするためには、まず横手市が存在し続けること、味噌の作り方を継承し作り続けてくれる人が必要で

ある。よって、今回は横手市という地域の現状と問題とその対策、また私が考えるこれからの横手市に対する提案をしていきたい。

Ⅰ 消滅可能性都市に入っている横手市

消滅可能性都市とは

近年「消滅可能性都市」という言葉をよく耳にすることが多いのではないだろうか。秋田県は全国で最も可能性が高い市町村が多く、大潟村を除いた地域すべてが該当する。消滅可能性都市とは、「2040年までに20～39歳の女性の数が2010年と比べて半減する」と推測される自治体のことを指し、2014年に民間研究機関「日本創成会議」が発表した。全国にある1,741の市区町村のうち896の市区町村が該当すると言われている。

消滅可能性都市が消滅都市になってしまえば、もはや再興するのは極めて難しいと考えられる。人口減少によって、経済が回らなくなることによる雇用の削減、所得の減少により生活が立ち行かなくなる。それによって子育て環境や就職率の低下が起こり、さらに人口減少へとつながり負のサイクルから抜け出せなくなってしまうだろう。当然行政サービスも立ち行かなくなる。そうなる前に手を打たなくてはならないため、対象地域の1つである横手市の行政は大慌てで対策を取り、実行している状態である。詳しくはⅡで述べたい。

考えられる要因

なぜ、横手市は消滅可能性都市として名を上げられてしまったのかということに関しては2つ要因が挙げられるのではないかと私は考える。1つ目は地形による要因だ。横手市は横手盆地という盆地にある市で、朝と夜の気温差が激しい。それによって作物の栄養分が詰まり美味しい作物が育つ。しかし、寒暖差が激しいということで人間にとってとても過ごしやすい気候とはいえずらい。2つ目は、輸入作物による買い叩きにあっていているということだ。横手市は米どころであると同時に果物の産地でもある。米に関しては高い関税がついているが果物に関してはアメリカをはじめとした海外から多くの低価格の果物が入ってくる。そうすると、どんなに手間と時間をかけて作物を作っても海外産の登場によって売れ行きが悪くなったり、市場で買い叩かれて収入が手間に対して見合なかつたりして農家が減っていったということも挙げられるのではないかと推測する。それを回避するために作物の「ブランド化」に力を入れるようになり、海外作物との価格競争からは抜け出そうとしていると考えられるが価格の壁を超えるのはとても難しいのが現実である。

Ⅱ 横手市が取り組んでいることは本当に吉と出ているのか

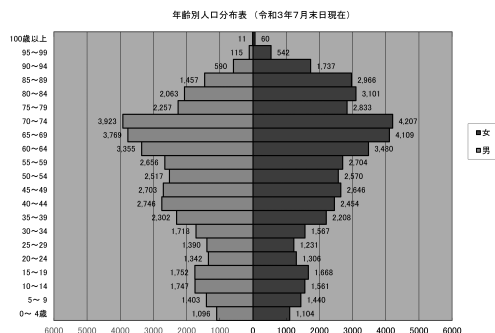


図1 令和3年7月時点の年齢人口 横手市HP

横手市は、図1のとおり高齢者人口が多く若者人口は少ない。このまま放置しておけば生産年齢人口が減少し続け、高齢者人口を支えられなくなる。そのため、まず市外から横手市内に来てもらえるような政策を取らなければならない。市の方でも移住支援者サイトを作成しており、移住をしたいと考えている人が一つのサイトで知りたい情報を知ることができるようにまとめている。

また、NPO法人「秋田キャリア支援ネットワーク」とも連携し、移住する前の相談から移住した後の住まいや就労に関しても相談や紹介をしてもらえる。行政は首都圏に在住していたもしくは勤務していた人に対する移住希望者に向けて5年以上住み続けるという条件付きで金銭的な補助制度も行っている。これは、未だ首都圏に大手企業の本社が固まっているという特徴を逆手に取り、多くの経験を積んだ人が横手に住んでくれる可能性もあるからターゲットを絞っているのではないと思われる。それだけでなく実際に横手で生活を行うことができるように整備しているということは移住を考えている人にとって、とても好印象を与えるのではないかと考えられる。

では、本当にこの政策によって移住者が増えているのか見ていこう。結論は、東京を中心とした首都圏からの移住者は増えている。2021年3月に改訂された横手市人口ビジョンを見ると、2018年の住民基本台帳人口移動報告をもとに東京都から137人、埼玉県から49人、神奈川県から59人、千葉県から27人移住していることが分かる。2020年のデータを見てみると東京都は0人、神奈川県53人、千葉県36人であった（e-Start,2020）。一見、移住者にとって好条件に思われるが、移住をするために必要なものはお金だけではない。また、5年経過した後その先も横手市に住んでくれるかといったら確証はない。もしかしたら、住民票だけ横手市において当人は違う場所にいる可能性もある。書面上では横手にいても実際にいなければ地域の活性化にも何にもならない。しかも、移住者に対する補助金は地方交付税交付金で補っている。地方交付税交付金とは「地方公共団体（都道府県や市区町村）は、私たちの日常生活に密接に結びついている教育・警察・消防・環境衛生・生活保護などの公的サービスを行うため、地方税を集めている。しかし、その地域の経済状況などによって、それぞれの地方公共団体の財政力に違いがある。そこで公的サービスに格差が生じないよう、国が地方公共団体の財

政力を調整するために支出する」ものである（国税庁HP参考）。要するに地方交付税交付金は国の予算から捻出されているのだ。その税金から移住者に対する予算を割いているため横手市内から集めた税金からではない。そのため、仮に5年で横手市に移住者が住んで出て行ってしまうても横手市の予算の中でも地方交付税交付金からの捻出であるため、市におけるダメージはあまりない。しかもこの制度によって地方自治体が自立することを援助しているようで国に依存させるという2面を持っている。これを繰り返していても一向に横手市の地域再生は進まないだろう。ではどうすべきなのか、Ⅲで詳しくみていく。

Ⅲ 私の描く横手市ビジョン～地域再生の業界者の経験を通して～

まだまだ私個人が考えられることは限られるため、経験者の文献を参考に今回は描いていきたいと思う。主に取り上げるのは、木下斉著の『地元がヤバイ…と思ったら読む 凡人のための地域再生入門』である。あらすじとしては、東京から新幹線で1時間、さらに在来線で20分のところが地元の主人公は、大学卒業後から東京で働いている。ある日地元の商店街にある小売店を畳む決断をした母のために帰省し、廃業手続き・不動産売却を行う中で高校の友人と再会する。それをきっかけに地元商店街のシャッター街再生、地域全体再生を行っていくという話だ。小説の内容はフィクションが混ざっているものの、著者の経験や考えが多く入っている。小説から私が横手市にも共通する課題を4つ挙げていきたい。

① 空き家問題

横手市はライフフルホームズといった大手企業とタッグを組み、空き家を一般の人が市のサイトで閲覧できるようにしている。また、横手市独自でこれとは別に空き家バンク制度を持っており事実、横手市には空き家問題を解決するために2つの制度が存在する。2021年8月4日現在、横手市の空き家バンクには3件の登録がある。市のHPによると2014年は14件が成約し、昨年の2020年には2件の成約である。成約した物件を見ることはできないが、今空き家バンクで閲覧できる物件を見ると間取りなど基本的な情報に加えて水洗トイレか汲み取り式か、雪下ろしが必要かどうか、雪捨て場が近いかなど地域特有のことも書かれている。行政の空き家バンクが機能していることをアピールしているが、2016年の横手市の調査によると市内には約1,700棟の空き家があり、空き家バンクに載っているのは、ほんの一部である。空き家ではあるものの、人に貸したくないという人も出ていると考えられる。その結果、空き家バンクに物件は入らず「空き家はある」状態になってしまう。逆に企業の方にはネーミングブランドから「積極的に貸したい物件はすでに民間の賃貸物件検索のポータルサイトに出て」（木下2018 p.112）くるのだ。空き家バンクは空き家問題を解決する良い手立てのよう

だが、まずそこに物件が集まらなければ意味がない。物件を集める努力が必要である。一般的に赤の他人に自分の家を貸す抵抗もあり空き家バンクの物件を増やすことは難航するだろう。また、地域コミュニティの繋がりが強いということはメリットばかりではない。強いということは自分たちのやっていることが筒抜けになるのだ。横手市は未だに村意識が存在する。このコロナ禍では東京から人が来たというだけでその家は村八分にされる。そのため、大叔父は私に横手に来て欲しいものの、今は来ないで欲しいと言われている。自分たちのテリトリーという意識が強く、空き家を人に貸すとなると周りにいい顔はされないだろう。そのような雰囲気もあることから空き家バンクがしっかり機能しないのではないだろうか。

② そもそも魅力的なまちづくりがされているのか

例えば、横手駅前には30年前までは商店街が広がっていて町の中心地の役割をしていたようだが、車が普及し、車社会になった現在では駅前には何もない状態に等しい。大叔父を電車で訪ねるときに利用する西口にはタクシー乗り場やレンタカーの営業所、東口にはホテルが2軒あるだけだ。よく首都圏では駅前を中心にまちづくりを行うが、横手では通用しない。電車は約1時間に1本の間隔で本数が少なく、市内で生活をするのなら車を持っておくことは必須事項だ。車を運転することが当たり前であるため、電車の時間に合わせて動くということが億劫であるのは確かだ。大叔父の家族は自転車で行ける距離のスーパーでさえ車を出して行く。こんなにも車で動くのだから駅前を中心としたまちづくりが行えず、駅前が閑散としているのだ。だが、県外から観光客を呼び込みたい、特に首都圏から呼び寄せたいのなら地方と異なり電車移動が当たり前であるため、駅前が寂しいのは致命傷である。駅前を盛り上げることが難しいのなら横手市が人に来て欲しいところへのアクセスをやすくすべきだ。具体例を挙げるとしたら増田町だ。市内にある町の1つで伝統的な蔵屋敷が並んでいる。ここに駅から降りてすぐに行けるように直通バスやタクシーが駅前に必ずいるようにするといった政策を取るべきなのではないか。

③ ここぞといった憩いの場がない

横手市は米どころであると同時に温泉どころでもある。そのため、祖母のすぐ上の兄が入居している老人ホームのお風呂は温泉である。市内にはホテルがいくつかあるが、どのホテルも温泉である。私大叔父の家を訪ねるときは、大人数でもあることから午後5時くらいに車で大叔父の家から近いホテルまで行き、温泉に入る。回数券を使えば、一人400円で大叔父は常に回数券を持っている。市民にとって温泉は身近で、「ばんば」(秋田では、ばあちゃんのことをばんばと呼

ぶ) たちは温泉に行くことも多い。温泉に行く際は必ずきゅうりやなすの漬物、いぶりがっこなど手作りのものを持ち寄ってお風呂上がりに休憩所に集まってばんば会がスタートする。この「ばんば会」は近所のどこの家の息子が借金苦だとかこの家は婿が持ち家を共有名義にしたことをいいことに親族に無断で土地を売ったとか、私の住む東京では絶対に知ることはできないような話が繰り返されている。例えば、大叔父に関した話だと自分の家の前の収入を知っている。みんな話した後には「これは秘密だべ」というが、もちろん人の口に戸は立てられない。だから、私は東京に住む祖母を経由して知っているわけだが。途中から話がヒートアップして何を言っているか全員分からなくなり最後は笑って終わる。楽しい会ではあるがとても話の前半は恐ろしい。そんな「ばんば」たちの生きがいでもある会だが、温泉の休憩所以外、このような場所がないのが問題ではないか。好んで「ばんば」たちは休憩所で話しているのではなく、そこ以外に集まる場所がないのだ。「横手市顧客利便施設こうじ庵」という場所があるが、ここは横手駅東口からバスで5分のところで市役所や横手川が近くにあり、名ばかりの憩いの場が存在しないわけではない。しかし、調理室や和室などあるがメインは麴の販売や麴の発酵についての紹介をしていてわざわざ地元の人は行かないらしい。存在は知っているが行くほどの魅力はないということで「あるだけ」になっていると考えられる。人が行きたいと思う憩いの場に作り替える必要があるだろう。

④ ハコモノの存在

特に文献と重なったところでもあるテーマだ。今回は明確な目的を示さないまま建物を建設し、できたはいいものの誰も使い方が分からず光熱費といった建物を維持するためのランニングコストだけがかかる建物をハコモノと指す。このハコモノの建設費用はどこから出ているかという国からのお金、地方交付税交付金で行われていることが多い。株式会社秋田ふるさと村が運営している「秋田ふるさと村」も「ハコモノ」の1つであった(横手市, 2019)。この施設はお土産やグルメ、プラネタリウム、室内遊び場、美術館が一つの場所にある複合施設である。観光バスのルートに組まれていたり、地元民の食事処として利用されて、今では東北屈指のテーマパークとして年間60万人(秋田ふるさと村HPより)が訪れる観光地であり2019年には25周年を迎えている。しかし、地元の人々からふるさと村にきたいと思う人たちを狙った施設にもかかわらず、美術館につながる通路にわざわざエレベーターではなく、凝ったデザインのエスカレーターについて批判があったり(現に私の親戚は口をそろえていっていたようだ)、オープンした当初は多くの人々が物珍しさで来場したものの、オープンした翌年には一気に来場者数が減少するといった「ハコモノ」の運命をたどっていた。しかし、運

営側の努力や入場料無料化によりその翌年にはV字回復をしている（粟津、2019）。ハコモノとして始まったふるさと村であるが現在はしっかりと市内の観光名所になっている。地元民から批判があったエレベーターに関しては予算を無理やり消化しようとした結果なのではないかと私は考えている。ふるさと村のように紆余曲折をしようまく回っている施設が全国にないわけではないだろうが、このように成功している建物は少ないだろう。

私が描く横手市ビジョン

結論として、木下氏も述べているが国のお金を使って「地域再生をしよう」ではなく自分たちのお金（自治体の）で行わなければならないと私も考える。そのためには誰かが動かなくてはならないし、形ばかりの事業ではなく小規模でもいいから地域再生を行いたい人が集まるべきだ。とは言ってもそのような人が多いわけでもない。まずは、行政の中で本当にその地域を再生することに関わりたい有志を集めそこから外部の人間や地元民を巻き込む方が妥当なやり方だろう。①～④について対外と対地元についての2つに分類して私の提案をしたい。まず対外については、②駅前にあるY×2（わいわい）プラザは観光者向けのイベントをメインとして行っているようで地元民をターゲットとしたものではないらしい。観光客が来づらい世間状況ではあるが、それならもっと外に向けた発信をすべきだ。市のSNSを見たが発信の仕方が弱いと私は感じた。対地元については、①空き家問題を減らす努力の前に地域の空き家バンクに対する認識を変える必要性、③地元の人々がちょっとした買い物を済ませるための店兼コンビニというのは実際に事例が存在する。そこで、私が提案するのは継業だ。実際に秋田県由利本荘市では「移住＋継業」モデルが行われている（日経MJ、2017）。地方の高齢化が進めば、町のパン屋や花屋といった自営業者も高齢者のことが多い。後継者がいなければ店を畳むしかないが、それにより地域の人々が集まる場は1つなくなる。そこで後継者を募り、店を人に譲り、店は存続させる。だが、前述したように赤の他人に自分が積み上げてきたものやノウハウ、レシピを貸したり譲ったりすることは簡単ではない。そのため、実行するためにはそれを仲介する人が必ず必要になる。④ふるさと村は成功したサイドになるが、③のところでは挙げた「顧客利便施設こうじ庵」はまだハコモノということができる。調理室がせつかくあるのだから今回のテーマでもある手作りみそ講座を開き、作り方を「ばんば」たちから学びつつ様々な年齢層の人が交流する場にしたい。そうすれば私の食べ続けたい味噌が半永久的に食べることに光が見えるかもしれない。

Ⅳ そういえば味噌の作り方って？

今回の論文のテーマからだいぶ離れてしまったが、ここで話を戻そう。日本に住んでいる人で味噌を食べたことがない人はいないと断言したい。多くの人が味噌と言われて思いつくのは味噌汁かもしれないが、それだけではない。茄子の味噌漬けや豚の味噌漬け、味噌おにぎり、納豆に入れたり、生のきゅうりをディップさせたり、一度は食べたことがあるのではないだろうか。毎日食べる習慣がなくなってきたてはいるものの、落ち着きたいときに、日本食が恋しくなった時に味噌汁を飲むとどこかほっとする不思議な力を持つ味噌汁だ。日本人の生活に味噌は欠かせない。ちなみに横手出身の祖母に味噌料理で思いつくものを聞くと真っ先に納豆汁（納豆をすり鉢ですりつぶして味噌と混ぜた汁物）が出てきた。納豆汁は秋田で正月に食べる栄養食でご馳走であったようだ。

一般的な味噌の作り方をまずは紹介したい。材料は、大豆、麴、塩の3つだ。2時間ほどゆでてつぶした大豆と麴を1：1の割合で混ぜ、全体量の20%程度の塩を入れて良く混ぜ合わせる。それが終わったら保存容器に敷き詰めて重しをのせて暗所で寝かせる。半年から1年後には食べることができる。しっかりとした衛生管理と保存容器内の空気が抜けていないとカビが生える原因になるため、そこは難しいが作ろうと思えば作ることは可能だ。

大叔母の手作り味噌は基礎的な作り方に加えて、大豆と麴と塩を混ぜるときに砂糖を入れて重しを乗せる前に昆布を入れるということだ（ちなみに大豆は大叔父の手作りのものを使う）。それにより甘めで味に深みが出た味噌に



写真1,2 家に届く味噌 著者撮影

なる。砂糖を入れる理由としては、農業が盛んなこの土地では塩分と糖分を農作業中に効率よく取ることができるように様々なところに砂糖と塩が入っていた昔の名残だと考えられる。さすがに今は、機械が発達して味噌玉を作るまでの工程は機械で行っている。写真1,2は実際に大叔母が私の家に送ってくれる味噌だ。中には味噌だけでなく味噌を作る際に入れる昆布やきゅうり、なすも入っている。きゅうりとなすは味噌が出来上がった後に入れるのだが、ごはんにもおつまみにもピッタリな味付けで箸が止まらない。そして、麴は行きつけの麴屋に買いに行き行って作るため、麴屋が市内には存在する（Ⅲで述べた顧客利便施設こうじ庵はもともと麴屋でその建物を市が買い取ったことでその名前がついている）。近年、

甘酒が「飲む点滴」と言われて注目されたこともあり麴に注目が集まっている。最近の地元での流行は米麴を自分たちで作ることらしく一から味噌を作る形になり、味噌づくりにそれぞれこだわりがあるようだ。

横手市に住む親戚に味噌について聞いてみると、意外にも味噌は市販のものを



写真3 内藤醤油の味噌 親戚撮影

食べているという答えが返ってきた。とはいっても「秋田甘みそ」(写真3)という市内にある内藤醤油店の味噌で秋田特有のものだ。しかも商品名の通り甘くて、家で作っていた味噌より甘めで県民の課題である塩分に関しては控えめになっているようだ。秋田県は全国でも塩と砂糖の消費量がトップレベルだが普段使う調味料にも入っていれば、上位に組み込むことにも納得だ。

おわりに

私が大叔母から味噌の作り方を教えてもらい、私自身が作れるようになればいいと言われればそれ以上でもそれ以下でもない。だが、味噌1つとっても地域文化である。後世に残すためには横手市という地域が存在しなくてはならないし、その味を知っている人がいることも重要だ。そのために横手市が取らなくてはならない政策は、もしかしたら子育て世代の呼び込みではないかもしれない。私から一つ提案するのなら老人ホームの魅力を発信することだ。祖母の3つ上の大叔父は横手市内の有料老人ホームで生活しているが、施設内に温泉設備、その隣にはバー、来た人も食べられるソフトクリーム食べ放題で月13万円だそうだ。逆に都心の某企業の有料老人ホームは湯舟と食事といったスタンダードプランで月35万円。利用者の要介護の段階によってももちろん異なりはするが横手市の老人ホームの方が魅力的ではないだろうか。特に認知症といった自立生活が困難で家族が老人ホームに入居して欲しいと考えている人をターゲットにする。近年は老人ホームの費用の高さや本人が入居を希望しないことから家族がサポートできなくなるギリギリのラインで入居することが多い。親が高齢で老人ホームに入居させることになればその子供は現役社会人を終えてセミリタイア世代の可能性が高い。そこで老人ホームの魅力を発信し、入居希望者が市内に移住し、入居者の家族も市内に移住して空き家に住み、農業といった横手市の事業の後継、お金よりも自分の趣味を優先する世代でもあるため味噌をはじめとした文化に興味を持ってもらい、地域活性を狙うこともできるのではないかと私は考える。このように、そううまくいくとは思えないが、若者の移住に予算を割いて移住してくれて住み続けてくれるのかどうかの賭けを行うより、必ず移住して半永久に住んでくれる

人たちを呼び込むという考えでもいいのではないだろうか。もちろん、現在横手市が行っている移住に関する支援はコロナ禍によってテレワークが普及し始めているため需要があると思われる。続けていくのは、1つの政策であろう。

ほかの自治体と逆の発想をするのはアリだと思う。それによって私が食べ続けたい味噌の行く末が安泰ならなお良しである。

参考文献

- ・国土交通政策研究所（2014）：「地域消滅時代」を見据えた今後の国土交通戦略のあり方について p.6
<https://lpg1x.com/pp3U2RDKhT4a3msH6>（閲覧日：2021年7月8日）
- ・日本創生会議（2014）：<https://lpg1x.com/yWwu7coRh6zbPD9n8>（閲覧日：2021年8月1日）
- ・国税庁HP：税の学習コーナー
<https://www.nta.go.jp/taxes/kids/hatten/page07.htm>（閲覧日：2021年8月16日）
- ・横手市HP：<https://lpg1x.com/9KzUxumrTaXLdvWS6>（閲覧日：2021年8月1日）
- ・横手市（2021）：横手市人口ビジョン
<https://lpg1x.com/CTUdv9qUJ4LhxisM6>（閲覧日：2021年8月2日）
- ・e-Start（2020）：住民基本台帳人口移動報告 参考表 横手市
<https://lpg1x.com/ctYDCN61czBzzVXg7>（閲覧日：2021年8月2日）
- ・木下斉（2018）：『地元がヤバイ…と思ったら読む凡人のための地域再生入門』ダイヤモンド社
- ・日経MJ（2017）：『「移住＋継業」モデル発進 秋田・由利本荘市』2017年7月24日 p.13
- ・横手市（2019）：横手市の財務書類4表 p.4
<https://lpg1x.com/V85fhdu3kJGtTaDs8>（閲覧日：2021年8月6日）
- ・栗津尚悦（2019）：「令和も秋田ふるさと村へGO! 県内外から年間60万人」あきた経済一経営随想 2019年6月
<https://lpg1x.com/y6jMGrWhz8BWiG6A8>（閲覧日：2021年8月6日）